

## 所長あいさつ

### 桜花に想う

4月1日、大村公園の桜が満開である。今日も桜のトンネルをくぐって教育センターに到着した。今年は天の恵みもあって桜を長く愛でることができる。

着任の日、先に満開を迎えた一本の桜の古木に圧倒された。青い空との絶妙なコントラストもあるが、桜の花そのものに心打たれた。ここ数年、春の嵐の中で満開を迎えるとすぐに散り去った桜。桜が好まれる理由もそうした刹那に生きる姿が、人の生き方と相俟っているから感動を与えるのだろう。しかし、私が心揺さぶられたのはむしろ桜花の色だった。凜と咲く淡い色に「ハッ」と心を掴まれた感じ。どこまでも深い「本物」の色が、何かしら心に刺さった。



### 本物との出会い

魂を揺さぶられるのは「本物」との出会いによる。学校現場において、子どもたちが関わるすべてのものに「本物」は存在している。図書館で読む本や校庭にある桜のような一木一草に心打たれ感化されることがある。しかし、意図的・計画的な営みである学校教育において、子どもたちが会う「本物」の主役は教師でありたい。各学校も静寂な時間が去り、始業式、入学式とにわかに活気を帯びてくる。期待と不安といった心情、さまざまな環境や事情を背負って子どもたちが通ってくる。そんな中に、教壇に立つ者として、出会うにふさわしい本物の教師かどうか、若しくは本物を目指そうとする姿勢をもった教師であるか、年度の始まりに当たり自省を促したい。

### 抱負として

教育センターは「学校支援・教員応援」の旗印のもと、研修や相談・支援といった業務を中核としている。私にとっても経験知の乏しい領域であり、これまでにない覚悟で業務に当たっている。しかしながら、時代は教育に対して冷酷である。働き方改革が進められる一方で、新学習指導要領の実施が目前に迫り、新しい学力観に基づいた教育や「Society5.0」を担う人材育成など新たな対応が求められている。こうした時代や社会の要請にどう応えていくか。本センターの役割は重要である。

4月1日に発表された新元号は「令和」。「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味がこめられていると聞く。本センターも、「本物」に出会える場所であり、利用される皆様にとって「心を寄せられる」存在であり続けたい。